せとうち発見の道企画展

「　虫明焼　～虫明から生まれた伝統工芸品～　」

2024年５月28日 ～ 2024年9月1日
於　瀬戸内市民図書館

◆虫明焼とは

虫明焼（むしあげやき）とは、瀬戸内市邑久町虫明でつくられている焼物で、岡山県の郷土伝統的工芸品に指定されています。その起源は明らかではありませんが、江戸時代に築かれた岡山藩の筆頭家老伊木家の「御用窯（ごようがま）」が虫明焼の始まりだといわれています。

虫明で生まれた虫明焼は、京焼の流れをくんだ茶陶が特徴のひとつであり、世間に広く知れ渡るきっかけをつくったのが、伊木家１４代当主伊木忠澄（いぎただすみ）（三猿斎（さんえいさい））です。三猿斎は茶人として知られ、幕末から明治にかけて京都の陶工、初代清風与平や真葛香山（まくずこうざん）を招き、自分好みの茶道具をつくらせました。

弘化（こうか）４年（1847）の春、京都の陶工、初代清風与平（せいふうよへい）（1801～61）が、弟子２人を連れて虫明を訪れます。伊木三猿斎（いぎさんえんさい）（1818～86）が、立場（たてば）（間口）窯で茶道具を制作するために招きました。与平が虫明で作成した作品には、「虫明」、あるいは、「琴浦」「明浦」という虫明の地を示す文字とともに「清風」という銘が入っています。そうした作品の中には、茶入、茶碗、水指といった点前道具もありますが、多くは当時の京都で制作されていた磁器や色絵磁器（いろえじき）の懐石道具を写したものでした。

◆現代につづく虫明焼

横山香宝に師事した黒井一楽（1914～96）は、昭和８年（1933）より作陶をはじめ、昭和５５年（1980）岡山県重要無形文化財保持者に認定されました。一楽の子、黒井千左（1945～）は京都市工芸指導所を卒業後、父について作陶を学びました。県展や日本伝統工芸展などで活躍し、平成 21 年（2009）瀬戸内市重要無形文化財保持者に、平成 23 年（2011）岡山県重要無形文化財保持者に認定されます。

黒井千左とその子、黒井博史（1974～）は、釉薬や陶土など虫明焼ならではの素材と技法を研究し、伝統をふまえつつも、象嵌（ぞうがん）や線文など新しい造形や感覚を取り入れた、現代の虫明焼の作品づくりを行っています。

展示作品の一部

黒井一楽　作　茶盌
縦 12 ㎝×横 12 ㎝
×高さ６ｃｍ
制作：昭和 60 年（1985）
中央公民館所蔵

黒井一楽　作　茶盌
縦 12 ㎝×横 12 ㎝
×高さ５ｃｍ
制作：平成２年（1990）
中央公民館所蔵

黒井千左　作　鉄釉茶盌
縦 13 ㎝×横 13 ㎝
×高さ６ｃｍ
制作：平成 13 年（2001）
中央公民館所蔵

黒井千左　作　彩色象嵌角皿　宇宙の彼方
縦 24 ㎝×横 46 ㎝
×高さ５ｃｍ
制作：平成 25 年（2013）
中央公民館所蔵

黒井博史　作　柿灰釉掛分茶盌
縦１４㎝×横 13.5 ㎝
×高さ７ｃｍ
制作：令和６年（2024）

黒井博史　作　窯変茶盌
縦 12.5 ㎝×横 13 ㎝
×高さ 7.5 ｃｍ
制作：令和６年（2024）